慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	河野密著『日本□會政黨史』
Sub Title	M. Kono : A history of socialist parties in Japan
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1961
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.34, No.4 (1961. 4) ,p.92- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19610415-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

河野密著

『日本社會政黨史』

昨年の秋のある日、日本近代史の研究者である Brooklin College の Hyman Kublin 教授と話しあつたときのことである。教授は佐久間貞一はどの程度日本で研究されているか、河上清はどうか、また田添鐵二はどうかという質問をされたが、これにたいして現在までのところ本格的な研究はなされていないようだと答えるより仕方がなかつた。すると教授は何故研究がなされないのかとさらに問われ、これにたいしては、「日本においては溫和な社會主義者・改良家・政治家は研究對象にならないのだ」と答えておいたが教授は深くうなずかれて納得されたようであつた。

戰後、わが國における社會思想・運動史の研究は目ざましい發展をみせてきたが、それらの論文著書はマルクス主義を基調とする思想・運動を過大評價し、あたかもそれが主流であつてそれより溫和な思想・運動はすべて脇役であり、問題とするにたらぬ勢力であるか、さもなければファッシズムにつらなる反動勢力として登場を許されるだけであつた。それほどにマルクス主義の思想・運動がさかんであつたならば革命がおきていたはずなのに、それがおきなかつたばかりでなく、いうところの「帝國主義戰爭」に突入したのはどういうわけであろうか、という疑問がとうぜんおこつてこなくてはならない。こうした著書論文は事實を誤つてつたえ、價値を轉倒して語つているのである。

『日本社會政黨史』は著者河野密氏がその「序文」において、「從來、日本で出版された社會主義運動史や社會主義政黨史は、おおむね共產主義運動の側からのものが多く、合法政黨の側からのものはほとんどない。私はかねてこれを遺憾に思い、いつかその穴をうめたいと念願していたが、本書はその願望の一端を實現しえたものと信じている」といつているように合法運動の面から書いた社會主義政黨史である點にまずその意義が高く評價されよう。著者はまた、戰前戰後を通じて社會政黨史を統一的にまとめあげたものはまだ知らないといつているが、たしかにその點で本書はよき參考書となろう。どのように統一的にまとめあげているか。

第一部の日本無產政黨史の部分は、明治前半期の社會政黨、明治三十年代以降の社會政黨、勞働運動の發展と無產政黨の誕生、無產政黨對立時代、無產政黨の選擧活動と國會鬪爭、無產政黨の統一—社會大衆黨の結成、日支事變以後—社會大衆黨の轉換、社會大衆黨

の解黨、の八章よりなる。第二部の日本社會黨十五年史は、日本社會黨の結黨、社會黨政權の時代、社會黨の悲況と分裂、左派社會黨・右派社會黨時代、分裂から統一へ、戰後の勞働運動、統一から再分裂まで、という七章よりなつている。各章はさらに詳細にいくつかの節よりなつているが、第一部、第二部を通じて、わが國で「社會思想」「社會主義」が學說思想として紹介されたころから、ようやく運動期に入り、いくたの困難をへて戰後の成熟期にいたり、今日におよぶという百年近くの長期間の運動を二五〇頁前後の本書に手ぎわよくまとめてある。

河野氏は本書の存在價値の第三番目のものとして「本書に書かれた大部分の出來事には、私自身がなんらかの形で關係するか、またこれに關係した人々から直接聞くかしているので、事實に誤謬がないと確信できることである。したがつて、將來、日本の社會主義政黨史を研究するものにとつて、指針の役割を果たしうるものと考える」(「序文」)といつている。一讀して、なるほど「誤謬」はないかもしれないが、こういう書き方では誤謬のおかしようがないではないかということをはるかに強く感ずる。たとえば「日本勞農黨の結黨式は大正十五年十二月九日、芝協調會館において行なわれ、麻生久を議長として次のような綱領、政策、人事を決定した」(八三頁)とあるが、かように結黨の日時、綱領、政策、人事だけを記していたのではミスプリントはあつても「誤謬」のおかしようがないのである。もつとも日本勞農黨が結成されるまでの經過は一頁ぐらいのあいだに記しているが、それはあくまで無味乾燥な表面的な事象を報告しているにすぎない。これはなにも日本勞農黨だけに限つた敍述の仕方ではなく本書を通じていえることである。河野氏は「本書を書くにあたつて、歷史家の立場に立つて客觀的に日本社會政黨史を敍述しようと心がけた」(「序文」)といつているが、客觀的ということが「年表」に多少の解說をつけ加えることで終る程度のものであつてよいとは思えない。一つの黨が生れ、分裂し、また合同するといつた過程にはそれだけの社會的背景、イデオロギーの對立、愛憎のきしみあい等々があつたはずである。しかしそうした條件はほとんどネグレクトされているので骨組だけはできていても肉がつかず、血が通つていないのである。

イデオロギー的な、あまりにもイデオロギー的な書にだけふれてきた人々にとつては、本書がそういつたものとはまるで正反對に、表にあらわれた事象だけを語るその態度を不滿に思うかもしれない。とつかれたように夜を徹してよみふけり、卷をおくころはすつかり社會主義者に歸依していたというようなことは望んでも不可能である。著者は四十年の實踐運動を通じてマルクス主義者からの挑撥や妨害をうけて苦勞しているはずであるが、どこをさがしてもマ

ルクス主義者にたいする攻撃の姿勢はない。また日本勞農黨黨員として運動に參加し、他黨との合同ののちには日勞派に戸籍をおき、河上派の參謀をつとめてきている著者であるが、これまた他黨、他派を批評することきわめてやわらかい。つまり本書はどこまでも紳士的である。あまりにも冷靜で紳士的であるので、「客觀的」という看板をかかげて傍觀主義に徹しすぎているのではないかとおもわれるくらいである。

以上は河野氏の態度にたいする批判であるが、書の内容についても二、三の意見を述べておこう。まず第一に全體を通じて敍述に新鮮味がかけているが、これは著者が表面的な事象だけを書き並べていくという態度に根本的な理由があろう。こうした態度で著作するかぎり新資料を加える餘地がないと考えた方がよいだろう（なぜなら某黨の創立日時や綱領、人事等は誰が書いても變えようがないから）。第二に、いままで意識的にかくされていた合法政黨の運動に力をいれた反面、より左翼からの衝撃にたいする反應がいきいきと語られていない。日本ではマルクス主義の實際政治におよぼす勢力はよわかつたが、その幻影におびえ、マルクス主義をどの程度容認するかまたはこれと對決するかといつた「許容度」により勞農黨とか日勞黨とか社民黨とかいつた社會主義政黨が出たり消えたりしたのだという見方も成りたつのである。その意味でマルクス主義陣營からの衝撃は無視できるものではないはずである。第三に、合法社會主義政黨を論ずる場合日支事變に際して社會大衆黨が方向轉換したことはもつとも大きな問題點であるが、本書ではこの理由として左右からの攻撃や國民感情のことがいわれているがそれらがどの程度であつたかという具體的なことははつきりされていない。戰爭にたいする合法社會主義政黨の最大の試練の時期であつたこの點の敍述は、當事者としての河野氏はもつと眞正面から向うべきではなかつたろうか。

以上、いくつかの批評なり意見を述べてきたが、本書が合法社會主義政黨史の唯一のまとまつた通史であることにはかわりがない。こういつた貴重な著書であるだけに、當然その傍觀的客觀主義が目につくのである。（中央公論社　三五〇圓）

（中村勝範）